

序

昭和40年代あたりから建築の性能論が盛んになり、43年建築センターに建築性能委員会が設置された。以来、今日に至るまで、性能論はいろんな方面で盛んに行なわれている。

性能論の目指す目的のひとつは、ある建築を造り上げるに当たり、性能の明らかな沢山のサブシステムの中から最適なものを選んで、合理的に組み立ててゆこうとすることにあると思われる。

しかし、論としては活発ではあるが、実用上は必ずしも一般的になっているとはいえない。その原因として考えられることは、多種多様な性能の明確で一般的な規定が難しいこと、各性能に対応した設計が実用的に十分確立されていないこと、そして施工と性能との関係が明確になっていない点が多いことなどであろう。

現在各方面で行なわれている研究のかなりの部分は、こうした問題の解明に向けられているとあってよく、とくに施工と性能の関係を明らかにしてゆくことは、建設業界における研究者の大きな責任であると考えられる。こうした問題についての研究は、派手な開発に比べれば地味で基礎的であるが、困難で長い時間を要する。

本号にも、そうしたことに関する報告が多いが、それぞれの分野での一步一步の前進が刻まれていると思う。

1975年4月

清水建設株式会社研究所長

工学博士 鳥田 専 右